

新しい敬語の補助動詞「くテミエル」が

保守的な共通語と抗争する方言戦略

江 端 義 夫

キーワード…敬語、補助動詞、「くテミエル」、方言分布、

地理言語学、言語地理学

〔要旨〕今まで日本語方言の研究において、「くテミエル」の実体についての論考は見られない。敬語の動詞としては「見える」が全国で用いられ「行く」「来る」「居る」にかわる語形となっているが、その補助動詞化した「くテミエル」が、どうして、愛知県と岐阜県にのみ分布しているだけなのかを考察した。臨地調査資料と通信調査資料とによって方言分布図を作成し、地理言語学的分析を行った。その結果、「くテミエル」が中部地方で早くに成立したが、保守的な東京方言の「くテイラツシャル」の威力におさえられ、勢力の拡大が十分には進んでいない現状が明らかになった。

一、はじめに

敬語の補助動詞「くテミエル」が、主に聞かれるのは、日本全国では中部日本のごく限られた地方だけである。たとえばそれは、次のように話されている。

△山田先生は、ただいま銀行へ行つてミエマス。(行つておられます。)(△印の文例は方言話者の確認を経

た用例である。以下同じ。)

上の文例において、接統助詞の「て」を介して「見える」が接合し、一体的な補助動詞の「テミエル」が成立していることが分かる。この「くテミエル」についての先行研究は殆どなく、筆者の調べたところでは、江戸時代に尾張地方の文献に若干の例が見られ、すでに名古屋城^{注1}下^{注2}一带にはこの敬讓表現が粹¹なもの言いとして流布していたことが確認できている。残念ながら、この「くテミエル」の分布についても、まだ報告されたものがなく、その上、どうして「くテミエル」が敬語表現になつているのかという理由についての見解も示されていないのが現状である。そこで筆者は、これらについて一応の所見を述べ、臨地調査と通信調査とによって得られた客観的な資料を示すとともに、現代日本語に一定の解釈を記しておくことにした。

二、少年女子に隆盛な敬語の補助動詞「くテミエル」

中部日本言語地図 Ⅰ (臨地調査)

A LINGUISTIC ATLAS OF THE CENTRAL JAPAN Ⅰ (FIELD · WORK)

図1 敬語補助動詞「行ッテミエル」(少年女子)

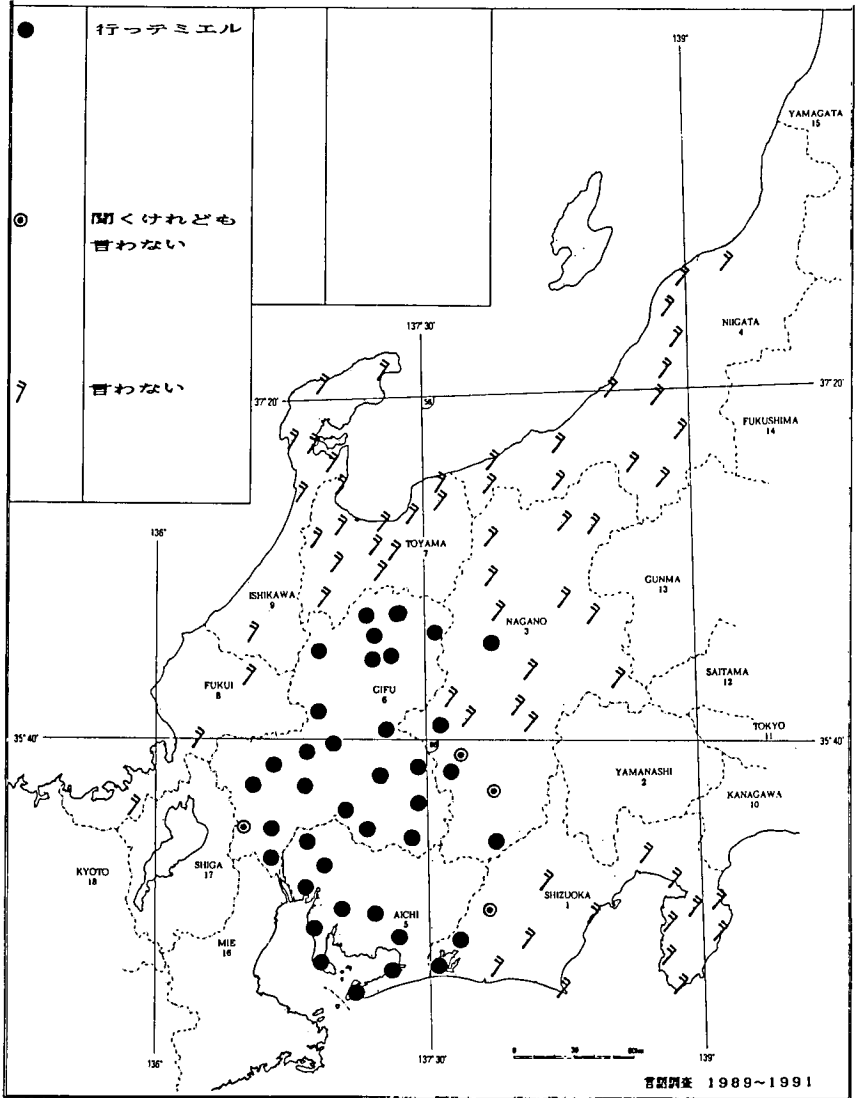


図1は、一九八九年から一九九一年にかけて、中部日本の全域について、中学校女子を対象にした臨地調査の結果を分布図に表したものである。この図の凡例上の黒丸符号によつて表された「行つてミエル」を日常生活で使用している地点が、言語地図上の分布地点として見定められている。

黒丸符号は岐阜県全域と愛知県全域に分布している。又、長野県の南西部と静岡県の西部にも分布している。しかし、北陸三県には全く分布していない。少年層女子が、ためらうことなく、対者及び第三者への尊敬語として「くてミエル」を使用するということは、特筆すべきことである。しかもこれが全日本の特定の地域で使用される敬語だという意識など全く持たないで、あらゆる場面で、「ていねいな言葉遣い」をしていると心得ているのである。世の中で「気づかれにくい方言」という研究⁴があるが、この「くてミエル」もその一種だと言つてもよいだろう。ともかくも、少年女子がこれを、「上品な言葉、敬意を表す言葉、ていねいな言葉」というイメージをもつて使用している。岐阜県や愛知県地方では、「くてミエル」が方言だという意識は聞かれない。その背景には、「行く」ことを「ゴザル」動詞で言い表し、「行つて居る」を「行つてゴザル」で呼応させる敬語の構成法が見られ、彼らは、敬語の動詞と敬語の補助動詞とが連動するものであることに慣れている向きがある。したがって、「見える」が「行く」の尊敬動詞として使用されると同時に、敬語の補助動詞として使

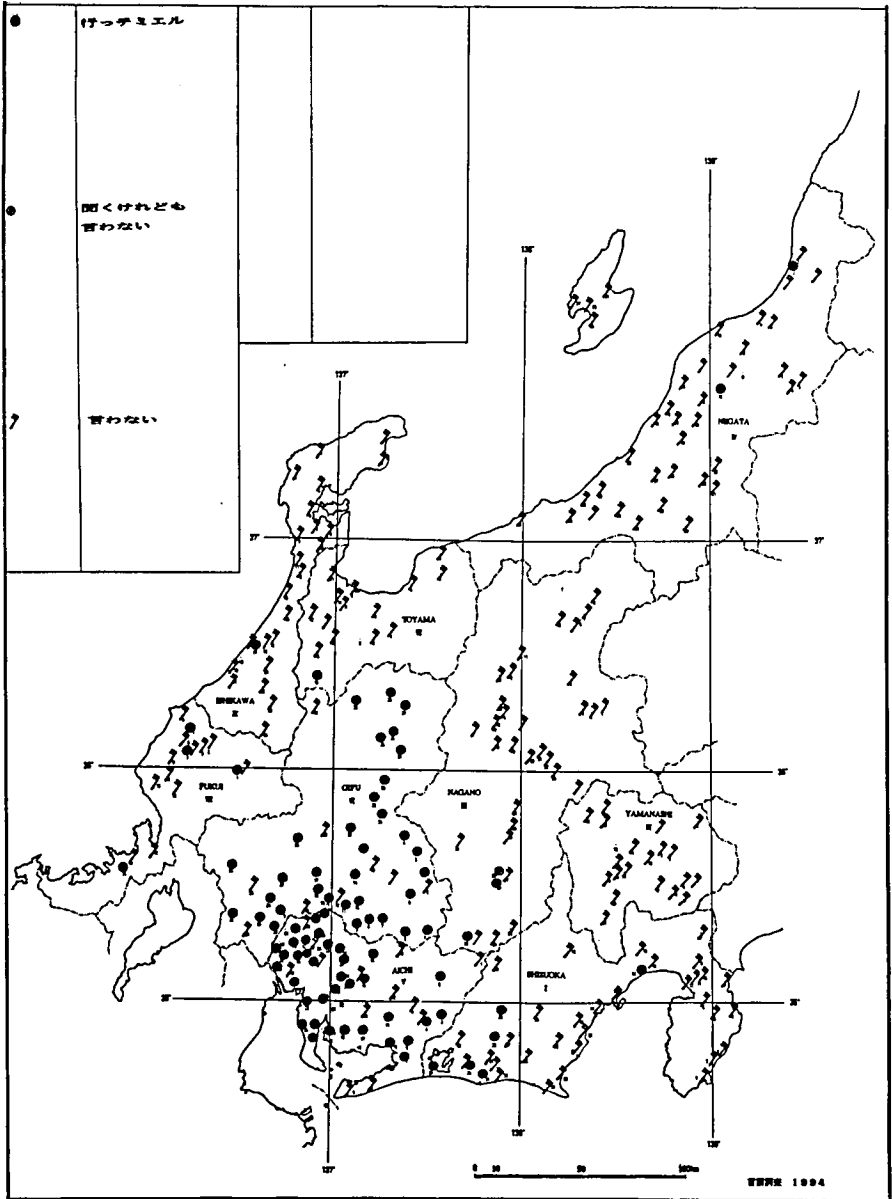
用されることは当然だと見ているのであろう。しかも、すでにその用法を一〇〇年以上も前から生活語にとり入れているのであり、日常のことにば違和感を抱く余地など、とうていあり得ないはずであらう。

ただし、岐阜県の西端の土地では、滋賀県の言葉に「くてミエル」が尊敬語でないのを知つて、これに疑いを持ちはじめ、「聞くけれども言わない」と回答している。又、長野県の本曾地方の二地点及び静岡県の天竜川北部の一点においても、「聞くけれども言わない」と回答した地点がある。これらの県境地帯では、いわゆる使用語ではなくて、理解語に転じている。こうした接境域では、種々の敬語が混在するために、「くてミエル」が方言的な使用のものだという意識を喚起する作用もありうるのであろう。

図1の少年層女子の分布図では、平成時代の今日でさえ、「くてミエル」が、対他尊敬の敬語補助動詞として、盛んに行われている実体が示されているのである。別の見方をすると、少年女子では北陸地方の三県（福井県、石川県、富山県）には、この「くてミエル」が全く分布していない事実にも注目しておくべきかもしれない。又、新潟県や山梨県や静岡県の中東部にも、この「くてミエル」の分布は存在していないのである。図1は、「言う」と「言わない」とが明瞭に分かれる図である。三重県の沿岸地域の少年女子は、この「くてミエル」を使用するけれども、この度は調査対象域に含められていないのが残念である。これを保

中部日本言語地図 II (通信調査)
 A LINGUISTIC ATLAS OF THE CENTRAL JAPAN II (MAIL)

図2 敬語補助動詞「行ッテミエル」(成人男女)



留して解釈すれば、江戸時代の徳川藩の勢力圏が強く及んだ地域に、「くテミエル」が結果として分布したと言つてよいのではなからうか。勿論、老年層にも、この「くテミエル」は分布しているし、今日での上品な敬語であることに変わりはない。全ゆる年層を通じて、いわば徳川藩域の人々のアイデンティティーの全一体と見てよい語形なのである。そして、しかも現代においても、東京方言の敬語がマスコミや教育を通して強烈な力で迫つてきているのも屈せず、独自に分布を維持させてきているのは、驚くばかりの底力と言つてよい。では、どうして、この敬語が圧殺されずに生きのびられたのであろうか。中部方言圏は、大阪方言圏の人々のように、自分達の方言を誇りに思い、公的な場でも土地ことばを使うという言語哲学は持っているのが普通である。先にも述べたように、少年層女子が公的な場でも、日常的な場でも区別なく、この「くテミエル」を使うのは、彼らが、これを方言だと意識していないからである。大阪地方の若者が、公的な場で「先生来ハツタ」というのを見るのとは、大きな違いがある。

したがって、中部地方では、この「くテミエル」は、分布が消滅することがないだろうとだけは言える。分布が拡大しているとも言えないが、縮小したとも言えないのである。ところが、老年層（成人男女）の分布図を見ると、興味深いことが言えてくる。

三、成人男女に隆盛な敬語の補助動詞「くテミエル」

通信調査によつて、中部地方全域を対象にして、「くテミエル」の使用を調査したところ、図2のような分布図が得られた。これを、図1の少年層の分布模様と比べてみよう。まず第一に言えることは、岐阜県と愛知県とに「くテミエル」の隆盛な分布が認められるということである。ただし、少年層では、岐阜県と愛知県の領域内では、これを言わないと回答する地点は無かつたのに、今回の通信調査では、言わないと回答した地点も少なくないということである。分布の中核地であり、発祥地でもある名古屋でも、「くテミエル」を言わないとする人がいたりする。成人男女は、すでに、「くテミエル」が中部地方の方言であることに気づき始めている証拠であると思われる。したがつて、都市生活を行う上での便宜上、名古屋文化圏の中核部で、「言わない」と回答する成人男女が増えてきているのである。その証拠に、岐阜県北部の山間地や愛知県の知多半島、三河湾沿岸などでは、「くテミエル」ばかりが単独で行われているのである。

それでは、少年層が進歩的で、成人男女が保守的かというところではない。先の図1の少年層で見られた分布は、江戸時代以来の安定した分布領域を示しているものである。その上に、図2で見られるように、新しい動きが、成人男女のリーダーシップによつて始まったということである。その新しい動きが二つある。その一つが、先に問題とし

た「くテミエル」を使わない傾向である。これは東海道沿線や都市部を中心に見られる。都市化が進み、中京工業都市化がさらに進んで、人口が密集すればするほど、「くテミエル」を異質な言葉と意識する場面が多くなり、自然に東京方言にとつて替わることになってしまふであろう。流入人口が、すべからく、「くテミエル」を使う中部方言的発話に染まってしまうかどうか、しばらく眺めていたい気もする。名古屋方言の代表と見なされる「くガヤ」（文末詞）が野卑なイメージを含むために打ち捨てられるのとは違つて、「くテミエル」は上品さやていねいさの尊敬語である点で、よそ者にも「使つてみようかな」という誘惑にさそひこむのに十分な魅力が備わつていゝと言つてもよい。古くさいと言うのではなく、誰もが使つていゝのであり、それは大阪弁の「くハル」（尊敬語）と同様の便利なもの言いの道具なのである。大阪の「くハル」が容易には廃れないように、愛知・岐阜の「くテミエル」が簡単には廃れないという予測は立つ。しかし、場面に応じたり、人の顔をながめては、「くテミエル」を使つたり使わなかつたりするようになつてきていることは確かである。そのように、成人男女の言語生活は多様化してきているのである。

言語生活の多様化に伴つて、図2の成人男女の図では、「くテミエル」ばかりの分布でなくて、「言わない」との回答も混じるようになってきた事態を示しているのである。その点で、図1の少年女子が純粹一色の「くテミエル」分

布を示すのと大いに異なる。ただし、少年女子も成人になれば、多面的な言語生活を余儀なくされるので、図2のような分布事態を示すことにもなるのであろう。したがつて、地理言語学で言うところの、語が古いイメージを与えられると消滅していくというルールには、必ずしも当たらないのである。図1の分布領域の話者たちは、この「くテミエル」を古くさいとは感じていないのである。この言い方は、粹で現代的で使い易いと思つていゝ。そういう言語意識が若者の間に存在しているのに、逆に成人男女では「使わない、言わない」という回答が増えているのは、結局、先に述べたような理由によると考えざるをえないのである。

さて、ここで、図2について別の問題をとり上げたい。それは、福井県に「くテミエル」を使うと回答した地点が四、石川県で一、富山県で一、新潟県で二、長野県で二、静岡県で六の合計一六地点に見られるということである。伝播というものは、地を這うように隣りから隣りへ伝わる。ところが、一六地点のうちには、伝播と考えられるものも見られるが、伝播とは考えにくいものもある。石川県や新潟県や静岡県の「くテミエル」は、盛んな愛知県や岐阜県の分布とのつながりが見られない。飛び火のように、分布しているのである。これは、どのように考えるべきであらうか？

そこで想起したいのは、時々話題にするところの、敬語動詞の補助動詞化という現象である。図2の中で、長野県

と富山県と静岡県の浜名湖周辺に見られる「くテミエル」の分布は、愛知・岐阜の濃厚な分布の伝播と考えてもさしつかえないであろう。ところが、新潟県の一地点や石川県の一地点、静岡県の富士川辺の一地点、福井県敦賀の一地点などについては、伝播によるなどの説明が適用できない。これの説明のためには、マスコミの力も教育の力も当てはまらない。ここでは、敬語の歴史的法則の結果が反映したものと考えられる。つまり、敬語動詞の「ミエル」が補助動詞の「くテミエル」に転用されたということであり、その法則の適用に条件反射が働いたと解釈できるのである。

じつは広島にも、「行っテミエル」を使用する知識人がいる。山口県にもいる。彼らに中部地方に住んだことがあるかを尋ねてみると、住んだことはないとの返事がかえってくる。「くテミエル」補助動詞の使用には、条件反射として、ていねいな尊敬語を言おうとして、無意識的に作成される共通の場合、全ての現代日本人に存在し、それがたまたま、図2の飛び火的分布地域に発現したと考えられるのである。これについては、後に詳述する。

四、「くテミエル」に関する新古の言語意識

先に図2で、成人男女の「くテミエル」について分布を眺めた。が、今度は図3において、図2における全ての話者に「くテミエル」の新古の意識を答えてもらい、それを表示してみた。図2では、一地点について六人の話者がい

ても、全ての話者が「くテミエル」を使うと答えた場合には、黒丸符号が一つ与えられるだけであった（豊橋市の場合など）。しかし、図3では、各地点の話者の人数分だけ、A、B、Cの符号を押し印してある。即ち、Aは「くテミエル」を古い感じと認識する人、Bは「くテミエル」を新しい感じと認識する人、Cはどちらとも言えないと認識する人である。

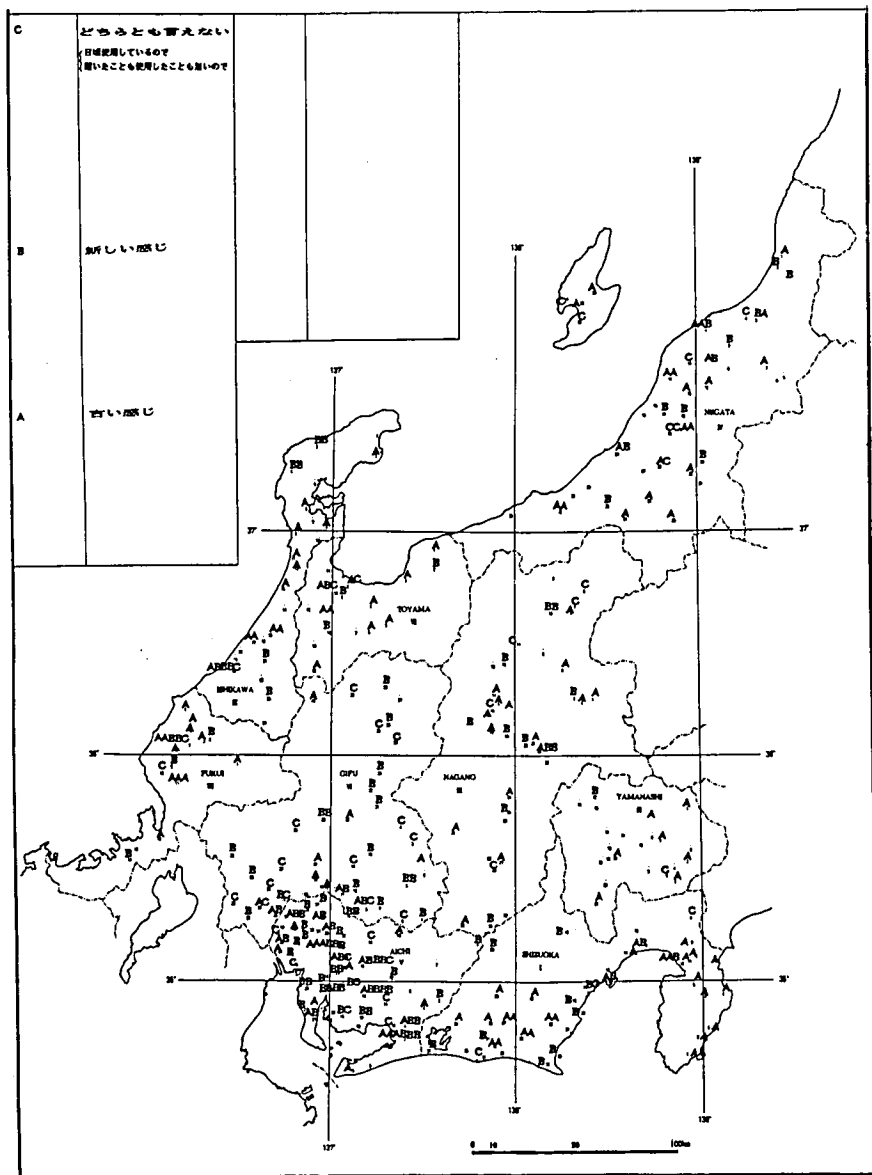
図3を見ると、愛知県や岐阜県で、Cの符号が目立つ。

Cには「日頃使用しているので、新古の判断がどちらとも言い切れない」とする者が多いことを示している。その点で、新潟県や長野県その他の県において、「くテミエル」が全く分布していない土地でのC「どちらとも言えない」とする回答とは全く質を異にする。愛知県や岐阜県以外の地域に見られる散在分布のCは、「聞いたことも使用したこともないので」新古の意識が「どちらとも言えない」のである。Cの分布に統一的なまとまりがない点で、「くテミエル」と無縁な地点であることが証明される。かくして、愛知県と岐阜県とに分布するCの「新古の意識がどちらとも言えない」のは、無意識的に「くテミエル」を使っているのであり、必須の言葉なのに、これを古いか新しいかと尋ねられても困惑するばかりだ、とのとまどいが窺われるのである。特に岐阜県の中心部から離れた地域や愛知県の周辺地域で、それらが聞かれるのは、「くテミエル」が周辺部で、より一層盛んであることを物語っている。

中部日本言語地図 II (通信調査)

A LINGUISTIC ATLAS OF THE CENTRAL JAPAN II (MAIL)

図3 「行ッテミエル」に関する新古の言語意識



さらに、図3で指摘できる二つめの点は、Bの「新しい感じ」と認識する地域が愛知県や岐阜県に分布するのは当然であるけれども、それ以外に、Bが中部地方の全域にも見られるということである。「くテミエル」を「新しい感じ」と把握する心情には、その言い方を受容してもよいという心づもりが表明されたと理解することができるとある。一般に古くさいと意識されたら、その語は捨てられていくのが宿命である。それなのに、「新しい感じ」とされる「くテミエル」が、全く分布していない中部地方のかなり広い地域にBが認められるのは、非常に興味ぶかいことなのである。

中部地方のどこの地域でも、「行っテミエル」という敬語が侵入してきたら、それを新しい快い語形と見なして受容してもよいという好意的な意識が存在するということがある。特にBの分布が著しいのは愛知県である。だから日常生活で活発に「くテミエル」が使用されている。又岐阜県でもBの分布は万遍なく認められる。そうでなくては、図1、2における愛知県、岐阜県の顕著な分布を矛盾なく説明できない。

他方で、愛知県や岐阜県に隣接する北陸三県にもBの「新しい感じ」とする分布が見られ、山梨県以外の中部地方の三県（新潟県、長野県、静岡県）にも、Bの分布がかなり広く認められる。もしも仮りに、何らかの刺激で、「くテミエル」が伝播したとすれば、これを喜んで受け入れた

いとす歓迎の意識が読みとれよう。

そこで、図2の分布を図3のと重ねてみることにしよう。図3で、Bの「新しい感じ」と受けとめている中部地方の諸県では、「くテミエル」の分布する地点が、わずかではあるが見られる。これらは、「くテミエル」を好ましく思い、新しいものと見なす地域であり、敬語動詞「ミエル」の補助動詞化したものとして、自然な歴史的推移を受容しようとしたものと言えるのである。こうした意識が敷かれていたからこそ、何らかの契機によって、「くテミエル」が伝播したか、あるいは生成されたかして、それらの遠隔地で、同時多発的に使用されるようになっていいると見なすことができるのである。

ただし、それらの「くテミエル」分布地点が互いにつながって、空間的な分布の連関を見せるようになるかどうかは、予測できない。衰退の一途をたどる分布ではなからう。確かに拡大しつつあるのである。しかし、中部日本の方言は、東と西との言語のせめぎあいを常に受けて、ゆれ動いているので、この地域で発生した新しい敬語補助動詞の「くテミエル」が、四周へ広がるかどうかは分かりかねる。少なくとも、愛知県と岐阜県とを中核地として、分布が四散していることだけは確認できる。

五、敬語動詞の補助動詞化

図1、2、3について、特に歴史的法則としての「敬語

動詞の補助動詞化」を考えなくては、合理的な説明ができない。この点について、以下に詳しく述べたい。

「行く」の敬語動詞に、当該地方では、a、d

a、ゴザル

b、オイデル

c、イラツシヤル

d、ミエル

の四つの語形が併用されている。

(表1参照) 老年層でよく使用されるのは、格調の高い「ゴザル」と親愛の「オイデル」であろう。たとえば、

△お寺の住職さんがゴザツタ。

(行かれた、来られた、居られた)

△市長さんが東京へオイデタ。

(行かれた、来られた、居られた)

のように言えば、古老の懇切な言い方と見てとられる。「ゴザル」や「オイデル」には、何か

しら古態の気風が感じられ、若者には使にくい語形になっている。周知のように、「ゴザル」^{註5}は中世の言葉であり、「オイデル」^{註6}は江戸時代

以後の言葉とされるが、使い方に偏向が見られる。関西の方面では、「オイデル」を高い待遇語と見なすが、関東^{註7}

表1

語形	意味	古さ	新しさ	卑俗さ	格調	よそことばらしさ	ていねいさ
ゴザル		+	-	-	+	-	+
オイデル		+	-	+	-	-	+
イラツシヤル		-	+	-	+	+	+
ミエル		-	+	-	+	-	+

では必ずしも高いとは見なしていない。中部地方という緩衝地帯には、様々な異語形が存在してもおかしくないが、「オイデル」が東方へ進出できずに足踏みしている状況は注目しておきたいところである。

それらの中で、「イラツシヤル」と「ミエル」は、新鮮なイメージで人々に受け入れられているようである。*「来らつシヤル」^{註8}や*「死なつシヤツタ」などは古めかしい「シヤル」ことばだと見られていても、「イラツシヤル」だけは新しいと受けとめられているのだから、不思議である。又、「ミエル」も、東京方言にも同様の用法があるので、好ましいものとされているようである。たとえば、これらは、

△今からどちらの百貨店へ、イラツシヤイマスの？(行かれるの?)

△これからおミエニナルんですか？(行かれるのですか?)
のように用いられて、少しハイカラな感じのものとされている。だから、若い人にとつても、「イラツシヤル」「ミエル」は慣じみの深い語形なのである。

ところが、これらの敬語動詞が親しい慣用の末に、補助動詞化して、運用の幅を広げ、より細やかに心情を表そうとするようになる。

(一) a' 「ゴザル」から「くデゴザル」へ

b' 「オイデル」から「くテオイデル」へ

c' 「イラツシヤル」から「くテイラツシヤル」へ

a' の「ゴザル」から「〜テゴザル」への推移は、すでに早く中世に用例が見られ、当該地方でも、双方の言い方が盛んに聞かれる。たとえば、

a' △和尚さんが往還で困つテゴザルわ。

(困つていらつしやるよ。)

△夕方遅くまであの人は仕事しテゴザル。

(仕事していらつしやる。)

△どこへ行つテゴザッタな、先生!

(行つていらつしやつたの? 先生!)

のように、上位に待遇する場合の古めかしい敬語として、補助動詞の「〜テゴザル」が使用されている。それと同じように、「〜テオイデル」も古めかしい語感がある。「〜テオイデル」は、

b' △先生が採点しテオイデタよ。(採点していらしたよ。)

△お寺の奥さんが庭の清掃をしテオイデタわ。(していらしたよ。)

△坊や、豆腐を買つテオイデ。(買っていらつしやる。)

のように、「〜テゴザル」よりも、ざつくばらんな感じが醸成される。少しくつろいだ雰囲気でも使用できるので、児童に対してもを言いつけるときにも使つたりする。こんな場合に、「〜買ってゴザル」とは言えない。こんなちがいが、「〜テゴザル」^母と「〜テオイデル」の本然的なちがいを生んでいるのである。

では次に、「〜テイラツシャル」について考えてみよう。

c' △先生が習字を書いテイラツシャル。(書いていらつしやる。)

△和尚さんがゆつくり歩いテイラツシャル。(歩いていらつしやつた。)

△坊や、急いで走つテイラツシャル。(走つテイラツシャル。)

上位に待遇する表現にも、下位に待遇する表現にも、「〜テイラツシャル」は頻用される。東京方言の使い方と同じである。ただし、この「〜テイラツシャル」は当該地方のイメージとしては、「新しがりや」の「きざな言い方」という感じがしないわけでもない。むしろ、「〜テゴザル」や「〜テオイデル」の言い方が無難とされはしないか。この「〜テイラツシャル」は、どちらかというと、東京方言の真似というほどではないが、「粹^イがつている」と見られないわけでもない。あるいは、そろそろしい敬語を使う、と敬遠されかねない。「行カツシャル」や「食ベラツシャル」、「寝ラツシャル」は、当該地域での古風なもの言いとされているのに、「〜テイラツシャル」は東京方言に色濃いのもの、この地方では疎遠であるために、よそことばのイメージが感じられるのは、奇妙なことである。

さて、このようなちがいが、それぞれの敬語補助動詞相互には存在するものの、併用されているのである。

(二) d' 「ミエル」から「〜テミエル」へ

東京方言にも、「行く」「来る」「居る」を「ミエル(見

える)「敬語動詞で表すことは可能である。共通語として普段に使う我々の日本語でも、「どこに行くか」というときに、「どちらにお見えになりますか?」と尋ねたりする。このような「ミエル」は、日本中どこでも通用するものである。

ところが、その敬語動詞「ミエル」が補助動詞になった場合には、少し事情がちがってくる。

たとえば、

d'△和尚さんはお元氣デミエマスか? (お元氣でいらっしやいますか?)

△先生は学校へ行つテミエマスか? (行つていらっしやいますか?)

△坊やは遊びつかれて、休んデミエルの? (休んでいらっしやるの?)

のように「くテミエル」は使用される。ただし、この「くテミエル」の命令形は存在しない。「テイラツシャイ」や「くテオイデ」には命令形が存在したのに、この「くテミエル」には、それが無い。ちょうど「くテゴザル」の命令形が当地方には存在しないのと共通している。日本の各地には、「くテゴザイン」とか「くテゴザレ」とかの命令形をもつ地域も知られているが、少なくとも、中部地方西部には、それは見られない。したがって、この「くテミエル」は「くテゴザル」と同じ文法的な振るまいをしてみるとよさそうである。しかし、「くテゴザル」がもはや古めかし

すぎるのに対して、この「くテミエル」は、新鮮である。江戸時代以降の使用が『未刊名古屋小説集』^{註10}などで確認できるし、図1の少年女子が日常語として今日でも頻用している実態によっても、この「くテミエル」のみずみずしさが分かるであろう。

以上のような群雄割拠の姿を見ると、中部日本の敬語補助動詞の動向は、どうなるのであろうかと心配になってくる。少なくとも、「くテゴザル」と「くテオイデル」は古めかしいものというレッテルを貼られて、衰退していくであろう。しかし、「くテミエル」は図1や図2や図3で確かめられたように、いやしくも「古めかしい」というイメージは全く持たれてはいなかったので、容易に捨て去られるとは思えない。しかも、如上の考察で知られるように、歴史的法則に従った合自然な造語法によって、「くテミエル」が成立しているのであり、使用者にも、新取の気概さえ見とれるのである。さらに、中部方言の独自の氣質を意識しはじめると、東京方言の「くテイラツシャル」に対立して「くテミエル」を使用してもいいではないか、という意地も生じて来よう。近畿では、「くテハル」と言うではないか、と聞き直る庶民意識もないではない。しかしながら、東京方言と近畿方言との仲間に在って、ひより見をしてきた中部方言には、主体的な主張が明確にあるとも言えず、結果が、こうであったとしか言いようがないのである。

先にも図1で指摘したように、少年層ではしっかりと「く

「テミエル」を堅持しているが、世間を広く知った成人男女は、図2で見られるように、「くテミエル」も使うが、他の敬語（結局は、東京方言の「くテイラツシャル」の使用を意味するであろう。）をも併せて使うという回答になるのである。

最後に、中部日本では、敬語動詞の「ゴザル」「オイデル」「イラツシャル」「ミエル」が全て補助動詞化し、その中で最も新しい「くテミエル」が隆盛な分布を示して使用されているが、「くテミエル」が他の三事象の分布領域や意味用法をも侵す所まで伸展するかどうかは分からないのが現状である。

六、おわりに

新しい敬語の補助動詞「くテミエル」の隆盛な分布の意味について考察してきた。言語法則を優先させれば、「ミエル」V「くテミエル」への歴史的变化の普遍化のために、分布は急速に拡大するはずであった。しかし、そのようにはならなかった。首都の言語が地方へ拡散伝播するという法則の方が力強かった。したがって、「くテイラシャル」の言い方が東日本地方を中心にする盛んであり、その猛威を受けて、「くテミエル」は萎縮しかけているかとさえ見受けられるのである。ここにも、歴史を貫く縦の線の代表である「くテミエル」が政治の時勢の力の象徴であるところの東京方言の「くテイラツシャル」と抗争し合い、

縦と横とのせめぎ合いを見せているのである。これを筆者は、「政治による歴史的变化阻止の原則」と言うことにしたい。図の1、2、3は、正に現代における天下分け目の戦いになぞらえることができるであろう。

注1 これは東京方言にも近畿方言にも見られないために、国語史研究上の対象にならなかったからである。

注2 名古屋地方での「見える」敬語について、文献上の用例を、「名古屋方言の補助動詞「くてみえる」がなぜ全国に波及する兆しを見せるのか」（『愛媛国語学研究』1、一九九五年八月）に記しておいた。この論文は、『日本語学論説資料』32、第2分冊（国語史、方言）一九九五年（平成七年）、論説資料保存会）に再録されている。

注3 愛知県・岐阜県地方の成人や少年たちは、「見える」敬語や「くテミエル」補助動詞が当該地方の特色をなす方言だということに気づかずに、これを使用している。

注4 沖裕子氏、篠崎晃一氏、高橋顕志氏、井上史雄氏らに諸論考がある。しかし、「くテミエル」に言及した考察は管見に及ぶかぎり見られなかった。

注5 ゴザルは、土井忠生・森田武・長南実編訳「邦訳日葡辞書」に（Gozari, u. atta. ゴザリ、ル、ツタ（御座り、る、った）尊敬すべき人が行く、来る、「…の状態・位置」にある、居る、あるいは、「質的に…で

ある。」とある。

注6 オイデル「さては御ゆさんにおいでて御ざあるか」
(虚清狂言・禁野)

江戸時代の滑稽本や人情本には「オイデナサイ、オイデナサル、オイデニナル」の諸用例が頻出する。しかし、通俗的で品位の低いものとの意識が読みとれる。

注7 オイデルの敬語意識について、かつて、林大先生から貴重なご助言をいただいたことがある。本稿を成す上で、林大先生からいただいたコメントがヒントになっている。記してお礼申し上げたい。

注8 *印を付けた語形は、現在使用されていないことを示す。

注9 ゴザルが男言葉、オイデルが女言葉とでも分類できそうな差がある。必ずしもゴザルを女が使わないのではないが、オイデルを男が使いにくいという感じはあるようだ。くデゴザルやくデオイデルについても同様である。

注10 「しかし、ここへ去年よめ入して見へたから、其のまへの事はしれん。」(滑稽祇園守)とあり、補助動詞の用法が見られる。江戸では、「行く、来る、居る」の敬語としての「見える」は存したが、まだ補助動詞化した敬語の用法は見られない。名古屋では、江戸に先がけて、それが見られる。

参考文献

- 芥子川津治『名古屋方言の研究』(泰文堂 昭和四六年五月三〇日)
- 江端義夫「名古屋方言の補助動詞(くてみえる)がなぜ全国に波及する兆しを見せるのか」(『愛媛国語学研究』第1号、平成七年八月一〇日、愛媛国語学研究会)
- 江端義夫「少年層の言語地図から始まる時勢語「ガメツイ」等の方言分布について」(『Socio Dialect Geography or Complex Dialect Geography or Dynamic Dialect Geography』(『愛媛国語学研究』第2号、平成八年三月一〇日、愛媛国語学研究会)
- 江端義夫「中部日本方言におけるワ行五段活用動詞の運用形「買って」の方言分布」(『国語方言の生成と展開』和泉書院、平成六年一〇月二五日)
- 江端義夫「「オトツイ」と「オトトイ」の消長」(『方言会』) 話体と文章体との分化と統合」(『国語教育研究』第33号、平成三年三月三一、広島大学教育学部光葉会)
- (広島大学教育学部)